$m ``Rugby \ for \ Coach \ and \ Player \ "$

Written by Don Rutherford 研究·再読

1. The Theme

「ボールを忘れて前進し続けゲームを有利に・・・」というような題目を乗り越えてしまっているプレーヤー達によって言い継がれてきました。そのような方策の使徒はほとんどいないけれど、「ボール無しでは出来ないゲーム」という大前提の元に言われてきました。題目の多くは議論の余地のないこととされ、絶えず思い起こされてきました。また長年携わってそれらのことを色々書いた教科書となるものもありませんでした。

初心者だけでなく、コーチ、プレーヤー、セレクター、顧問がこの本に中に興味を広げる何らかを見つけたり、知識を増し、重要なことは遠近画法によって見るようになり、正しい優先順位をつけるようになることを望んでいます。更に経験を積んでいくといくらかは古い帽子に見えるかもしれませんがすべてではありません。熱心に望まれる結果であり、経験を積んだコーチ、プレーヤー、セレクター、顧問等が新しい光の中でラグビーを見ることを十分に勇気づけられるでしょう。もしそうなればこの本は大いに役立つものになるでしょう。

最上のラグビーは眼を見張った大観衆の前で鍛えあげた 15 人が華々しく繰り広げる自由で流動的なゲームです。最悪のゲームは地獄の 80 分を通してチーム 15 人それぞれバラバラで転んだり突き当たったりし、プレーヤーだけでなく一握りの観客への楽しみを与えないものです。 200 年ほど前に始められラグビーは楽しいことが愛好者の考えの基石になってきました。プレーヤーによく彼らの楽しみに変わりがなく変わることが歓迎されていない限り絶えず把握されることが肝要です。ゲームが盛大に続けられヨーロッパからはるか東の国やアメリカへと普及していった時がヤード尺となって説明しています。

もちろんある時期化には現実的な準備やプレーを変えることの抵抗がありました。幸いなことに最終結論は力強い意思の除々な浸透により芸術性や科学の面で知識と技術を改善することが出来たのは引き続いている知識と技術を余分に改良すべきでないという理由からです。

学校におけるコーチングは通常受け入れられますが、いくらかの追加の理由でクラブの大多数で教育は続ける必要はないと思われ、最終段階で結果的に学校レベルで無駄であったり否定されたりしています。今世紀の代表チームの国際試合の結果をざっと見てさえもそれらを疎かにすることの愚かさを表しています。

私が先に指摘したように実際に必要な資料がなければなりません。資料を使うプレーヤー、コーチも考える責任があります。チームの一人一人の個人の技術を引き出すような方法で取り扱う責任があります。同時に有効な資料を最高に取り入れチームパターンやプレーシステムを系統的だてる責任があります。考えるために与えられた十分な時間がなくチームとして練習するための時間がいっそう少ないのは残念なことです。

英国諸島のゲームでは FW の個人の目的はボールをとることと考える傾向が強く、BK の唯一の特権はトライをして得点するのにボールを使うことと考えられています。不幸にも「二つ一対のものは一つになることはない」というキップリングの言葉が浸透し FW が優る方が試合に勝てるという考えが一般に認められています。FW がスクラムやラインアウトでボールをとることが FW の仕事の始めであり、全てである風潮が年々見られてきました。FW と BK の 2 つのユニットは一方がしていることを理解しなければなりません。理解するのが早ければ早いほどチームとしてうまくいくのです。

我々はラグビーは 15 人のゲームであることを忘れがちです。ようするにそれぞれが全力を尽くし繰り返し全力を発揮することに努力しなければなりません。

ラグビーでは手足、胴体、頭脳を使い大いに働く大変な要求がありそれに応えねばなりません。少なくとも多くの即興的なことのために論理的な思考をして対応することも求められます。 FW が前進するのにパスは後方にしなければならいと現実を認めつつ FW を進めるのに明らかに捨てれをタイプで取り組まなくてはなりません。

有効なスペースを十分に使われていないのに感じざるを得ません。プレーヤー達の進歩は改善できるでしょうし、我々の頭脳は土曜日の午後は使用可能になっています。

今日これは本当の面白みのために毎週している人々に非常に厳しい批判と思われています。「よく多くの関わりより多くの楽しむにはどうしらたよいか」という質問には「もっとゲームのことを考えもっと練習したらよい」というのが応えですが注意して下さい。「もっと時間をかけなさい」と言っているのではありません。考えて練習すれば楽しみは計り知れないほど増すということです。

素晴らしいクラブや英国諸島の国際試合ことや目立ったプレーヤーのことを話題にすることを急ぐべきかもしれませんが改善は常に維持されるというよりも簡潔的傾向があるものでおそらくゲームに対する全体理解が基本的に浅いということです。

今日のゲームは 27 条のルールによって進められています。原始的には本質的実際的なものはなかったということはそれ自身興味あることです。

我々は「ルールは破られることを予定している」という古い時代のことを熟知しています。 ルールを作る人はいつでも思考の欠如や多くのプレーヤーやゲーム否定論によりルールを改訂 し修正してきました。そしていつも結果的に当然と言える筋道へ色々と変化や修正がなされま した

あきらかに思考の欠如を示す最近の例としては「試験期のルールが混然一体とされたもの」と呼ばれるオーストラリア制定のルールがあります。このルールの目的は両25ヤードラインの間のタッチへ直接出すキックを思い止まらせるもので、ゲームの大部分を無駄に成功することを目指してゲームを持って走ることを勇気づけるものでした。しかし多くの場合そのようになりませんでした。特にフルバックの場合そうでなく、彼らの返答は直接タッチキック出来るように25ヤード地域に走り戻って蹴るというものでした。

プレーヤー達はルールの可能性を期待しなかっただけでなく、フルバックが以前のルールのようにタッチへボールを蹴ることによって休息を与えるのを予測し腰に手を当てて待つといい有様でした。彼らは勿論攻撃に加わるべく後方へ移動し続けるべきです。

他の重要なルールの改訂は昔のウィングフォワード、今日のフランカーについてのものです。 ルースフォワードは相手ハーフバックを恐れさせるためにスクラムやラインアウトを離れる時 機の問題です。またラインアウトから 10 ヤード退いて一息つく暇を与えるルールやルースフォ ワードはスクラムに付き続けるかスクラムからボールが出るまではハインドモーストフットの 後に居続けねばならないという今日のルールは著しく気の利いたものです。 プレーヤーやコー チがこれらの改訂が引き出しているランニングやハンドリングによる可能性を十分に探究する よう望みたいものです。

永い年月にわたって小さな改訂は何度となされましたがそれらは全てゲームの普及発展に役立っています。 Admiral Sir Percy Royds は彼の著書 The History of the Laws of Rugby Football の中に「Laws may come and laws may go, but the game goes on forever」と述べています。

プレーヤーや現コーチは本当に意味深い事は忘れてはなりません。ゲームは永遠になされます。その将来は彼らの姿勢や考え方が肯定的であるかどうか一人一人に手中にかかっているのです。ルールの改訂については個人とチームがそれぞれできる限りのことをする役目を持っています。それは本質的には handling and running game であり機敏な機智が大変有効であるということです。

これらの点が思い起こされれば活気にあふれる状況になり、英国諸島がラグビー誕生の地と その初めに非常に素晴らしいことをしたように将来に大いに貢献することができるでしょう。

我々は組織に入っている国や外へ出る栓が無いままになっている多くの国の仲間を持っています。国際的に認められることは過去において非常に多くのチャンスとなりました。一つの機会を提供するだけでもそうでしたし、さらにまだどうしたらよいか知られていないこともありますがこれは個人的な失敗ではありません。当面する課題を解消する適当な準備を彼らに与えること無しに有能なプレーヤー達を差し向けた組織の失敗です。

我々はゲームに対する理解を増すように改革する以外に何もできません。正しいコーチングを進めることと組織化することがこれらの面に素晴らしい働きをします。これらを実施している多くの学校やクラブ、諸州の努力は十分で活動なされていない場合の刺激になるでしょう。

そのように続けられることは多くの神話より楽しめるラグビーの道を明らからするでしょう。 そして始めることによってラグビーで使っている言葉や言葉使いの正しい意味を理解できるで しょう。

次ページに原文を記しておきます。各自一読願います。

2010.12.03 西川 義行

The Theme

As a player one was on occasions reminded by those whose infectious enthusiasm had almost overcome them, 'to forget the ball and get on with the b... game'. Whilst hardly being a disciple of such a policy, if for no other reason than that it is a difficult game to play without the ball, one is constantly reminded that much is taken for granted in Rugby Union Football and that there has not been a great deal of textbook literature over the years.

One hopes that the beginner, either coach or player, the selector and the administrator, will find in this book something to broaden their interest, help to increase their knowledge, and more important, get things in perspective and the priorities right. For the more experienced then, some of this may be seen as old hat, but certainly not all of it and consequently, it is earnestly hoped, it may sufficiently stimulate even the very experienced coaches, players, selectors and administrators to see their rugby in a new light. If it does, then this book will have been well worthwhile.

At best Rugby Union Football is a free flowing game where fifteen athletic players combine together to produce an abundance of *spectacular* movement before a large and appreciative audience. At its worst it is fifteen half-fit individuals stumbling and bumbling through eighty minutes of hell, affording enjoyment neither to themselves nor to the handful of spectators present. Enjoyment has always been the corner-stone of rugby administrators* thinking since the game was founded some hundred-odd years ago.

This is vital to grasp immediately because unless changes have been thought to be for the good of the players and their consequent enjoyment then change has not been welcomed. Time has proved this to be a good yardstick because the game continues to flourish and is ever growing in Europe, the Far East and America.

There have, of course, been many resistances in certain quarters to change in the actual preparation for and playing of the game. Happily, the last decade has seen the gradual erosion of the entrenched views and as people have seen that we can improve our knowledge and skill in art and science, without undue harm, then there is no conceivable reason why we should not similarly improve the knowledge and skill of our leisure pursuits.

Coaching in schools has always been accepted, but for some odd reason it has never been felt necessary to continue this education in the vast majority of British rugby clubs, that is until the last decade, and consequently any good work done at school level has been largely wasted or neglected thereafter and even a cursory glance at international results against Commonwealth teams since the turn of the century will show the folly of such negligence.

	New Zealand							South Africa					
	(1905 onwards)							(1903 onwards)					
	Pts							Pts					
	P	W	L	D	\mathbf{F}	A	P	W	L	D	\mathbf{F}	A	
England	8	1	7	0	52	104	6	1	4	1	20	40	
Scotland	5	0	4	1	18	47	8	3	5	0	38	104	
Ireland	5	0	5	0	17	58	8	1	6	1	48	124	
Wales	8	3	5	0	47	110	7	0	6	1	15	61	
BritishIsles	19	2	12	2	122	278	24	3	16	5	168	309	

As I have previously indicated, in any textbook on rugby there must inevitably be a lot of material that is simple and obvious, albeit vitally necessary, but there is an onus on the thinking player and coach to use this material and manipulate it in such a way as to bring out the individual skills of each member of his team and at the same time formulate a team pattern or system of play that makes best use of the available material. Regrettably there has rarely been enough time given to thinking and even less to practising as a team.

In the British Isles the game has leant heavily on the idea that the sole purpose of the forwards was to get the ball, and the sole prerogative of the backs was to use it in an effort to score tries. Unhappily to corrupt Kipling's words 'the twain ne'er seem to have met!' Our Commonwealth cousins, whilst being the first to admit that 'forwards win matches', have shown year in, year out, that when the forwards get the ball from scrum or line-out,

this is just the beginning of their job and not the end. The two units, forwards and backs, must understand what the other is doing and the quicker this is achieved then the better they will play as a team.

We have so often forgotten that this is a fifteen-man team game; a point that I shall endeavour to stress time and time again.

In rugby we have to use our limbs, trunk and brain and whilst this must place tremendous demands on the individual, it does at least theoretically allow room for much improvisation. Even allowing for the fact that the ball has to be passed backwards in order to make progress forward our approach has been remarkably stereotyped.

One cannot help but feel that we have not used the available space as well as we might, maybe our deployment of players could be improved upon and certainly our brains are under-used on a Saturday afternoon. Now this might seem excessively hard criticism of those who turn out week in, week out, for the sheer fun of it.

But the question is 'How much better could they be and thus how much more they would enjoy their rugby'. If they thought more about it and practised more effectively, note, I did not say 'spent more time'—then I cannot help but feel that their enjoyment would be immeasurably increased. I should hasten to point out that there have been some wonderful club and international matches in the British Isles and some quite outstanding players, but improvements have tended to be spasmodic rather than sustained and this is probably due to our game lacking a basic depth of overall understanding.

Today's game is made up of twenty-seven laws and this in itself is interesting because originally there were virtually none. We are all familiar with the old adage that 'Laws were meant to be broken' and whenever the law makers have made changes or modifications to the Laws of the Game, lack of thought and/or a negative approach for most players and their teams has usually resulted in a further change or modification having to be made in due course.

A fairly recent example of this lack of thought was apparent when the 'Australian Dispensation Law', as it was called, was incorporated in the Laws for a trial period. The object of this law was to discourage kicking on the full into touch between the twenty-fives and to encourage running with the ball and for the most part it appears to have been immensely successful, but there were certainly many, full backs in particular, whose only answer was to run yards back into their twenty-five area in order to find a direct touch.

They had not anticipated the possibilities of the law, nor had their team mates who were invariably seen waiting, standing hands on hips, expecting the full back to give them a rest by kicking the ball into touch as under the previous law. They should, of course, have been moving back to take part in any counter-attack.

Other law changes of real importance have concerned the old time wing forwards, more accurately referred to as flank or loose forwards today, and the moment of time they could leave scrums and line-outs to terrorize opposition half-backs. Today's law giving ten yards breathing space from a line-out and keeping the loose forwards attached to scrums or behind the hindmost foot until the ball is out of the scrum seems eminently sensible. Let us hope that players and coaches will fully explore the possibilities for running and handling which these changes have presented.

There have been hundreds of minor changes in the laws over the years, all of which have endeavoured to add to the scope of the game. Admiral Sir Percy Royds said in his book *The History of the Laws of Rugby Football*, 'Laws may come and laws may go, but the game goes on forever'.

The significant point that players and now coaches should remember is just this, the game does go on forever and it is beholden on everyone to be positive in their approach, to note that law changes often bring with them a change in an individual's and possibly a team's role and that this is essentially a handling and running game, where quick wits count for so much.

If these points are noted then a truly exhilarating spectacle will follow and the British Isles, as the birthplace of the game, should be able to contribute as much in the future to the game as it obviously did at its inception.

We have plenty of natural talent which has rarely been organized or else has become despondent through lack of outlet valves to the top. Getting international recognition has been too chancy a business in the past and even when the opportunity has been presented, few have known how to cope with it. This has not been the individual's fault, but that of a system which has thrown together talented players without giving them adequate preparation for the task in hand.

We can do nothing but improve if we increase our understanding of the game, and

correct coaching and the organization it implies can work wonders in this direction. There are a significant number of schools, clubs, and counties who are doing just this and their efforts should be a spur to the less active.

What follows should clear up a number of myths and point the way to more enjoyable rugby. To begin with we should all understand the correct meaning of the terms that we use in rugby.